

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この闇の風景は単純な力強い構成を持っている。左手には溪の向こうを夜空をきって爬虫の背のような尾根が蜿蜒と匍つている。黒ぐろとした杉林がパノラマのように廻って私の行手を深い闇で包んでしまっている。その前景のなかへ、右手からも杉山が傾きかかる。この山に沿って街道がゆく。行手は如何ともすることの出来ない闇である。この闇に達するまでの距離は百メートル余りもあるうか。その途中にたった一軒だけ人家があつて、楓のような木が幻灯のように光を浴びている。大きな闇の風景のなかで (a) そこだけがこもり明るい。街道もその前では少し明るくなっている。(1)、前方の闇はそのため (b) 一層暗くなり街道を呑込んでしまう。

ある夜のこと、私は私の前を私と同じように提灯なしで歩いてゆく一人の男があるのに気がついた。それは突然その家の前の明るみの中へ姿を現したのだった。男は明るみを背にしてだんだん闇の中へはいつて行ってしまった。私はそれを一種異様な感動を持って眺めていた。Aそれは、あらわにいつて見れば、「自分も暫くすればあの男のように闇の中へ消えていくのだ。誰かがここに立ってみていればやはりあんな風に消えていくのであろう。」という感動なのであつたが、消えてゆく男の姿はそんなにも感情的であつた。

その家の前を過ぎると、道は溪に沿った杉林にさしかかる。右手は切り立った崖である。それが闇のなかである。なんとこの暗い道だろう。Bそこは月夜でも暗い。歩くにしたがつて暗さが増してゆく。不安が高まって来る。それがある極点にまで達しようとするとき、突如とおつという音が足元から起こる。それは杉林の切れ目だ。ちようど真下に当る瀬の音がにわかになつてその切れ目から押寄せて来るのだ。その音は凄まじい。気持ちにはある混乱が起こってくる。大工とか左官とかそういった連中が溪の中で不可思議な酒盛をしていて、その高笑いがワツハツハ、ワツハツハときこえて来るような気のするところがある。心が振じ切れそうになる。するとその途端、道の行手にパツと一箇の電灯が見える。闇はそこで終わったのだ。もうそこからは私の部屋に近い。電灯の見えるところが崖の曲角で、そこを曲がれば直ぐ私の旅館だ。電灯を見ながらゆく道は心易い。私は最後の安堵とともにその道を歩いてゆく。(2)、霧の夜がある。霧にかすんでしまつて電灯が遠くに見える。行つても行つてもそこまで行きつけないような不思議な気持ちになるのだ。いつもの安堵が消えてしまう。遠い遠い気持ちになる。

闇の風景はいつ見ても変わらない。私はこの道を何度ということなく歩いた。いつも同じC空想を繰り返した。印象が心に刻みつけられてしまった。街道の闇、闇より濃い樹木の闇の姿はいまも私の眼に残っている。それを思い浮かべるたびに私は、今いる都会のどこへ行つても電灯の光の流れている夜を薄っ汚なく思わないではいられないのである。

「闇の絵巻」

問一 この作品の作者は、一九二五年に同人誌「青空」を創刊し、『檸檬』、『城のある町にて』などの作品を発表している。この作品の作者名を漢字で書き、この作者と同時期に執筆活動を始めた小説家をアオの中から選び、記号で答えなさい。

ア 芥川龍之介 イ 川端康成 ウ 有島武郎 エ 坪内逍遙 オ 森鷗外

問二 空欄(1)、(2)には共通の接続詞が入る。適切なものを次のアオの中から選び、記号で答えなさい。

ア また イ たとえば ウ つまり エ しかし オ そして

問三 空欄(a)、(b)にはいる適切な語句を次のアオから選び、記号で答えなさい。

ア なお イ もし ウ まだ エ たぶん オ ただ

問四 傍線部Aの「それ」の指す内容を書きなさい。

問五 傍線部Bの理由は、周りが杉の木で囲まれているからであるが、そのことを端的に表現している部分を十一字で書き抜きなさい。

問六 傍線部Cの「空想」と思われる部分が二カ所ある。その二カ所を文中に出てくる順に書き抜き、それぞれの始めと終わり(句読点を除く)の五文字で答えなさい。

問七 作者は「街道の闇」をどのように思っているか、次のアオエの文から適切なものを記号で答えなさい。

ア 闇の中の道に自然の恐怖を感じている。 イ 闇の中の道に日常的な親しみを感じている。  
ウ 闇の中の風景に将来の希望を感じている。 エ 闇の中の空想により自分との一体感を感じている。

二、次の①～⑤の文で使われている修辭法を後のアオの中から選び、記号で答えなさい。

①バラの香りが、私の心を癒やしてくれた。  
②まるで針のような冬の雨が私の体を冷たくぬらした。  
③急がば回れ。  
④そのころの私は、今も変わらないが、はなはだ風采もあがらなかった。  
⑤私は組織の歯車にすぎない。

三、 次の①～⑤の漢字の読み方をカタカナで書きなさい。

ア 直喩 イ 隱喩 ウ 擬人法 エ 逆接法 オ 挿入法

① 界限 ② 忌憚 ③ 支度 ④ 憤怒 ⑤ 吹聴

四、 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

元日の朝刊からしばらくの間「折々のうた」の連載を休ませていただくことにした。一九七九年から始めた連載がこんなに長く続くものになるうとは、私の夢にも予想しないことだったが、今までも間に二回休憩させてもらったことがある。この欄は新聞休刊日を除くすべての日に掲載されるので、私の能力をもってしては丸二年間の全力疾走が限度、しばらく息を整えてからまた再開ということにせざるを得ない。言ってみれば、毎日新たにスタート・ラインに戻っては百メートル障害競走をくり返すような仕事であるため、A マラソン・ランナーとはまた違った息の調整が必要であるらしい。

川の瀬に立つ一つ岩乗り越ゆと水たのしげに乗り越えやまぬ

窪田空穂

B 人間のする日々の営みが、この歌にうたわれていた水のような具合にはいかないのは、致し方ないこととはいえ残念なことである。考えてみれば、自然界というものには人間がもつような「疲労」という現象はない。木の葉が枯れて落ちるのも疲労ではなく、(a)必然である。人が自然界に深い①ナグサめと活力の源泉を見出す理由もそこにある。

とはいえ、「折々のうた」の仕事は、疲労に倍する楽しみと発見の喜びを私自身に恵んでくれるので、実際のところ休載などということなしにすませられるならどれほどいいだろうかと思う。しかし私はこの仕事以外にもなすべき事を持っているので、それらもまた、私自身にとってにはしばしばきわめて重要なものなので、「折々のうた」の仕事と折り合いをつけるのがなかなか大変になる。これも前掲の空穂の歌同様「折々のうた」で数ヶ月前に引いたものだが、坂本龍馬の次の歌にはそんなわけでC 不思議な愛着と共感をおぼえる。

「淀川をさかのぼりて」と詞書のある歌  
藤の花今をさかりと咲きつれど船いそがれて見返りもせず

坂本龍馬

私は今、この原稿をパリで書いています。これが新聞にのころには日本に帰っているはずだが、「折々のうた」に関することに話題を限つていえば、この欄の存在がフランスの、また西ドイツやオランダなどの多少とも日本に関心を持っている――そしてその数は②ヒヤク的にふえている――文学者や編集者やラジオ・テレビ関係者のあいだで、一種の驚きとともに語られていることは、その当事者であるだけになんとも印象的なことである。

何に対して彼らが驚いているかといえば、「大新聞の第一面に毎日詩が一つずつのっている」という事実に対してである。詩人たちは私に、「本当か」ときく。足かけ八年前から続けていると答えると、「信じられない。何という文化だ」と驚く。「『ル・モンド』はそれをやるべきだ」と何人も (b) にいったのが面白かったが、日本には短い詩の長い伝統があって、それが今なお生きているからこんなことが可能なんだよ、と私がいうたびに、「ううん、そうだな。D こちらの詩ではそういう小さなコラムは成り立たないな」と首を振る。私は自分自身が(c)自由詩形の作者だから、彼らの気持ちがよくわかる。短歌、特に俳句の形式はともかくにも彼らにとつては不思議な生き物なのである。

大岡信著 「『折々のうた』の一四年」

- 問一 傍線①、②のカタカナを漢字で書きなさい。
- 問二 傍線(a)の対義語を漢字二文字で答えなさい。
- 問三 空欄(b)には、「みんなが口をそろえて同じことを言う」という意味の四字熟語が入る。漢字四文字で答えなさい。
- 問四 傍線部(c)の「自由詩」に対して、短歌や俳句などを何詩というか、漢字二文字で答えなさい。
- 問五 傍線部Aの部分は、作者がどのようなことをすることか、文中の表現を用いて、十字以内で答えなさい。
- 問六 傍線部Bの部分で、水のどのようなことが人間と違うことか、短歌中の語句三文字で答えなさい。
- 問七 傍線部Cの部分に関して、短歌中の「藤の花」は何をさしているか、文中の語句で答えなさい。
- 又、「いそがれて見返りもせず」の部分は作者にあてはめると、作者のどのような状況をいつているのか、十文字以内で答えなさい。
- 問八 傍線部Dの部分の「成り立たない」理由を文中の語をつなぎ、十字程度で答えなさい。

